

## 戦後における「政治体制と村落」によせて

(東京) 聽見音産

秋の村研大会では「政治体制と村落」が課題となりあげられる。昨年にもまして活発な討論がくりひろげられ、成果をあげることだろうと今から大いにたのしみである。考えてみれば、こういうテーマがとりあげられるということは、少くとも農村社会学にとつてはきわめて大きな意味のあることのように思う。このような問題のたて方は、きわめて新らしいし、そばかでなしにこれまでとりあげられながら十分に解明されなかつた多くの問題にもこたえることができるのでないかと思う。

農村社会学の研究は、(農業・農村についての他の分野の研究をよく知らないので、社会学のみを問題とすれば)これまで小さな対象をそれだけ、きりはなしてとりあつかう傾きが強かつたようと思える。同族やその他の部落内の社会関係に関する戦前の研究についても、戦後の部落の研究についてもそういうことがいえるのはなかろうか。昨年問題にされた村落共同体についても、とかく内側からばかり追求されていたように感じる。

政治という問題を、村落共同体や部落内社会関係に関連してとりあげられた方の中に農村社会学では、有賀先生があつた。先生の場合には、今までの(かなり長い期間が一

括して含まれるのであるが)政治が、社会保険を欠いているために、村落共同体を部落内

とは忘れることができない。

障を欠いているために、村落共同体を部落内社会関係を通じて自主的に相互の生活保障がはたされねばならなかつた事情が強調され

ている。(たとえば有賀喜左衛門『家制度と社会福祉』社会事業昭和三〇年一〇月号、同

『村落共同体と家』村研年報Ⅲ所収)

先生のいわれる問題はきわめて重要なものではあるが、政治体制の問題はこれにつくるものではもちろんない。ここでは、政治の手のとどきえないところを補充するという意味で、村落共同体などが考えられているようであるが、今日の政治体制の中で果している役割はそれだけであろうか。むしろ、政治体制それ自体にとつての、きわめて積極的な考え方としての役割を負わされているのではないかと思われる。

農民層の分解が極端なまでに歪められ「經營の規模の拡大が制限され、他面、兼業化といふ形での下層農民の滞留がみられる」。しかも昨日では、いよいよ生活水準のきりさげが顕著になつてきてる。それでも、下層農民は農村内に滞留しなければならない。彼らが全き労働者として分解してしまうことなどなんに亘る社会問題をひきおこすかは容易に想像できる。それは直接に社会体制それ自体を動搖させずにはおかしい。小池基之・常盤政治両氏が分析しておられるように、(土地制度史学創刊号および村研年報Ⅴ所収)農

こうみてくるならば、「下層農民の滞留のメカニズムが分析されねばならなくなる。ここ

に、政治体制が村落に与えている重要な規制をみとめねばならない。下層農民として浮説することを可能にする条件が村落にあること

そして、その条件の維持が政治体制にとつてきわめて重要なこととされることが、考えられる。有賀先生が、社会保障を欠いた政治体制が村落共同体による生活保障を余儀なくさせるとして抱撫された事柄を、私は右のようにもつと積極的に把握する必要があるよう

思う。

陳腐な表現であるが、「日本の貧困」ということが、村落の意味を重要なものとし、しかも政治と村落の、そして村落を媒介して農民との結びつきをきわめてシリアルなものとしている。地主制の解体後の農村では、政治と村落のむすびつきが(地主という媒介者の存在をはぶいたことによって)きわめて顯著になり、重要ななつてきている。一つ一つの政策とその遂行過程が、明確な重みをもつて村落と農民の上におしかぶさつていてる。

秋の村研大会は、戦後の政治体制と村落の問題も吟味されるであろう。最近問題になつてきている町村合併の意義とその影響も、政

治体制と村落という視点からは、どれほど問題にされたであろう。今回のテーマは、それ

以上の農家――がいかに多いものかというこ

田舎有志義であるばかりでなしに、今日の村落を従来とはことなつた視角から考えてみると、ことによつて、昨年のテーマ村落共同体の問題に対しても新らしい成果をうむことができるのであろう。すくなくとも、これまで内側からばかり検討していた村落を、外側から見なおすことだけでも大きな意味がある。昨年も問題になつた部落の構ということと、集団の累積ということとも、視角をえてみることで明確になるのではないかと思われる。

いざれにしても、大会の成果を、ことに具体的な事実によつての成果を大いに期待したい。もとめられるまことに、あまりに手首勝手な興味で先手の研究と大会の課題を料理してしまつたようだ。これも大会に寄せる希望の大きいあまりと諦めないとだまない。